

淀川は元の姿を取り戻せるのか

趣味の釣りで過ごす休日。不本意にも針を根掛かりしたり、海からの突風でビニール袋を海に流してしまうことがあった。そんな時、環境に悪影響を与えた自分自身が本当に嫌になり、ひどく後悔する僕に、両親から環境保護のボランティアに参加してみてもどうかと提案された。海や川で過ごす休日の時間を大切にしながらも、不本意とはいえ悪影響を与えた倍以上に、環境に恩返しもしていこうと、それから僕のボランティア活動が始まった。中学3年生の4月のことだった。

僕が参加している環境保護のボランティア団体は「淀川水系イタセンパラ保全市民ネットワーク」通称イタセンネットだ。淀川流域で活動する市民団体と研究機関、行政が連携し、国の天然記念物イタセンパラと生息地の淀川の自然再生を目指すネットワークだ。僕の自宅は淀川河川敷から徒歩1分。物心がついた頃から、玄関を開けた時に見える河川敷の景色や耳に入る虫の音から、四季を感じて生きてきた。だから、この団体で活動したいと強く思った。

イタセンネットの具体的な活動は、淀川の城北地域のワンドでの在来種の保護と観測、特定外来種の駆除、河川敷周辺の清掃などだ。4月から11月に渡って土日のいずれかに月2回実施している。1回の参加者は約30名程度。大学教授、大阪府水生生物センターの職員が中心となっている。

初めてボランティアに参加した日、団体の中心メンバーから、「中学生はボランティア活動が長続きしない」と言われたのを覚えている。定期試験もあればクラブ活動もある。そして高校受験。そう思われても仕方がないだろう。中学生は期待されていないと感じたものだ。

中学3年生の1年間、僕の活動は河川敷周辺のゴミ拾い、在来種と外来種の仕分けだった。1回の活動で収集するゴミは5袋程度。ペットボトルが一番多く、タバコの吸い殻、お菓子などのビニール袋、釣り道具の残骸などの順だ。これは現在も変化はなく、量も中身も同じようなものだ。ゴミ問題は、一人一人のモラル、これが一番難しい課題ではないかと、つくづく考えさせられる。

高校1年から現在までの2年間は、地引網で魚を捕獲し、外来種の駆除、在来種の数の

確認とリリース、また外来植物の駆除活動をしている。名前も覚えてもらえず、坊主と呼ばれていた中学生だったが、今は僕の熱意も随分と理解してもらえたようだ。

この3年間、在来種は確実に増えてきた。最初の年は、1回の地引網でイタセンパラは7匹程度の確認だったが、今年は20匹程度だ。ヨドゼゼラも3倍程度に増えている。これまで一度も確認できなかったウグイも登場した。モツゴ、カワヒガイも数を増やしている。またブラックバスやブルーギルなど、一般にメジャーな外来種も、水温によって多少の増減はあるものの、確実に減少傾向にある。魚に限ってではあるが、人々の協力と継続的な地道な努力で、随分と環境は変わるのである。しかし外来植物のナガエツルノゲイトウやボタンウキクサは、生長速度が速いうえ、繁殖能力が非常に強く、どれだけ駆除しても翌月には元の姿、まさに、いたちごっこだ。繁殖能力に勝る駆除が必要で、毎日コツコツ駆除しない限り、完全に除去するのは難しいだろう。

大阪の経済発展の水路として貢献してきた淀川。僕にとっては四季を感じ、大切な遊び場でもある。しかし、このような現状を、どれだけの人々が知っているのだろうか。僕に何ができるのだろうか。当時、中学生だった僕は、科学部の友達や顧問、クラスの友人に訴え続けた。勿論、最初は誰にも相手にされない。お魚くんという、あだ名をつけられ、逆に和やかな雰囲気すらなる。力量不足を痛感するだけの不完全燃焼だ。それでも諦めずに毎日、訴え続けた。

山が動いたのは夏休み前だった。科学部の仲間達が、クラブ活動として、一度、参加してみようと提案してくれた。それからはクラブの顧問や数人のクラスメイトも参加してくれ、全員で8名が参加するようになった。参加した友人達は、僕の言葉が理解できたと口々に言ってくれ、11月の最終日まで継続して参加してくれた。ボランティア活動は、伝え続ける、興味を持ってもらう、実際に参加してもらう、ここまでの流れが非常に重要だと学んだ。しかし高校生になり現在も続いているのは僕を含めて3名、半数以下だ。継続してもらうこと、薄れていく関心への手立て、ボランティア活動は、これが一番難しい。中学生はボランティア活動が長続きしないという言葉は、皮肉にも僕自身が感じることになった。

淀川は元の姿を取り戻せるのか？それはひとりひとりのモラル、意識、関心、市民の協力と行動、そして継続した活動が必要だ。すぐに成果や達成感を実感することはない。骨

が折れるような地道な活動で、決して簡単な道のりではない。外来植物に至っては、活動回数や参加人数が増えない限り、僕が生きている時代には無理かもしれないとさえ感じる。

しかし僕は、この3年間で、人々の協力と努力のもと、少しずつ変化していく環境や生態系の過程に関わり、諦めない気持ちを持って行動を続けることが何より大切だと経験した。そして感じたことを伝え続けたことで、1人から3人へと輪が広がったのだ。人から見れば小さな成果かも知れないが、僕にとっては財産だ。同じ思いの人が増えることで、可能になることもあるだろう。

僕はこれからも、釣りと魚を愛し、自然とともに暮らし、自然への恩返しとなる活動も続けていこう。そして小さな輪を少しずつ広げていくために、感じたことを身近な人に伝え続けていこう。それが、淀川が元の姿を取り戻すための、僕ができる千里の道の第一歩だと信じている。